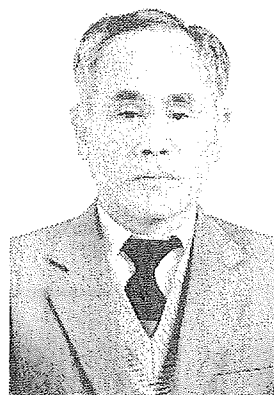


佳 作 | 第一部門 |

手のぬくもりに今日覚めて



奈良 県

喜多嶋

毅

「くやしいうから頑張るのです」

私は「なぜそんなに頑張るんですか？」と尋ねられると、常々そう答えてきた。

この「くやしいう」には二つの意味があった。一つは、一流大学を卒業し、一流商社に勤めながら自分だけがベータチェック病にかかり、失明という貧乏くじをひいたことにたいするくやしさである。健常時代の仲間から同情されればされるほど腹立たしさを感じたのはこのくやしさからかもしれない。もう一つのくやしさは死にきれなかったことにたいするくやしさである。このくやしさは、一方では

敗北感につながるもので、失明後努力を続けながらも、どこか心の隅に自暴自棄的なものを感じていたのもそのせいだったのだろう。

いずれにしても、私の心の底に障害にたいするゆがんだ見方がひそんでいたことは事実であった。私はオイルショック以前の猛烈時代と呼ばれる頃の商社に勤めていた。もちろんそれまでは本当に順調な人生だった。ところが一旦歯車が狂うと、まるで階段を転げ落ちるかのようにな落の底に滑り落ちていく。私もまさにその通りだった。

昭和四十六年一月、先輩がヨーロッパに駐在することと、かなりの仕事が終わってきた。毎晩終電近くまで残業しても仕事が付かない。泣き事も言いたくなかったので、休日も返上してどうにかこなしていた。

そんな時である。女手一つで私を育ててきた母が急死したとの知らせを受けたのは。一瞬目の前が真っ暗になった。つい三週間ほど前、正月をと共に過ごしたばかりなのに。まさかと我が耳を疑ったが、急遽東京から大阪に帰ってみると、母のむくろがそこに横たわっていた。

母のとむらいもそこにすませ、私は東京に戻らねばならなかった。もうくよくよする暇もないくらい仕事が多忙だった。期限内に追われる仕事ばかりで、朝は早くから、夜は遅くまで働いた。その上、毎週と言っていいほど大阪に帰り、後片付けをしなければならなかった。

学生時代から体力には自信があった。自信があったからこそ無理をする。そんな無理が続く内、あ

る日私は会社で倒れてしまった。救急車で私は病院に運ばれたが、過労とわかるとわずか一日いただけ、もう仕事に戻っていた。

結局私は体調不順のまま働き続けた。その年の秋、私ははじめて目に異変を感じた。それは取り引き先との野球の親睦試合の日だった。打席に立つと、不思議なことにボールが途中で消える。守っている時も同じで、バッターが打った瞬間一時的にボールが消え、私のそばにきて再び見え出すという珍現象が起こった。私は三振に照れ、エラーに申しわけなさそうなふりをしてそのまま自分の胸に潜めておいた。

その年の十二月のある朝、左眼の視野に黒い糸のような物を見つけた。鏡を見ても目の表面には何もない。その黒い糸は夜の接待の時にはまるで墨を溶かしたように広がっていた。翌日会社の眼科に行ったが、目が充血しているとのことで眼底も見ないまま目薬のみが手渡された。もちろん数日たってもよくなるらない。再度眼科を訪れた。医者は眼底を覗くやあわてた様子で大学病院を紹介してくれた。私はそこでベーチェット病という難病にかかっていることを知った。

なおす方法もない、またいつまで病院通いをしなければならぬかもわからない。たった一人の身寄りともいふべき妹は、ついたばかりの仕事を失うのが嫌で私のそばから離れていった。私は奈良にある亡き母の実家を頼りに、闘病生活を送ることに決めた。もちろんそこも私の面倒をみるほどの余裕はない。

親戚の家に居候しているとはいえ、心理的には全く一人ぼっちだった。愚痴を言いたくてもその相手がいない。外に出かけたくても付き添う人がいないのだ。少しでも見える間はタクシーを利用して通院した。その努力の甲斐もむなしく小さな眼底出血を繰り返し、その都度ほとんど見えなくなった。それでも毎日通院し、眼球に痛い注射をうたなければならぬ。しかも眼球は毎日の注射に固くなって、うつ場所を探すのにも一苦労する有様であった。

四ヵ月で右眼が失明した。残る左眼もかなり視力は低下している。私の気持ちは切迫していた。「この左眼に大きな眼底出血が起きれば」

その不安に毎日脅えた。夜、眠るのが怖かった。そして朝になると本当におそろおそろ目をあけ、異変がなければほっとひと息するのであった。

付添いも雇った。いいと言われることにはお金にいとめをつけなかった。それでも左眼は、十ヵ月ほどで室内を行動するのも不自由なくらい視力低下をきたしていた。あれほど摂生してきたのに。病氣と闘う気持ちは萎えていた。

それでも病気はおさまらなかつた。右眼の眼圧が上がり、頭痛がし出した。食欲もなく嘔吐もした。医者は眼球摘出を宣言したが、私は拒み、強い薬を飲んで我慢した。そのため、脱水症となり、手は歯ブラシやはしを少し握るだけでも痙攣した。しかし、痛みはおさまらない。私は朦朧としたまま手術室に運ばれ、あっと言う間に眼球を摘出されていた。

まぶたの奥は空虚だった。恥をさらしてまで生きたくない。私の偏った心はそう叫んでいた。結局は自分の気の弱さのせいだったのだろう、失敗したまま私はベッドに横たわる日々をすごしていた。こんな私を古い知人が自分の家にひきとってくれた。

「死ねないなら生きるしかない」

私は自分にそう言いきかせた。私の社会復帰への道が始まった。

大阪ライトハウスでは歩行と点字を主として習った。普通男子でも一週六時間程度の歩行訓練時間であったが、私は週十時間の訓練に耐えた。夏の暑さの中ではめまいを感じたこともしばしばあった。また、余りの緊張のため、夜もろくろく眠れなかった。そのせいもあってか、まだ光を感じていた左眼も緑内障のため、訓練途上で摘出せざるを得なくなった。努力すればしたで、何かを失う。私は一方ではまたまた敗北感を感じながらショックを振り切ろうと、退院後すぐに訓練に戻った。

そのかいもあってか、一年間の訓練期間を終える頃には点字を読む速度はライトハウスの長い歴史の中でも五本の指に入ると言われるほど速くなっていった。もちろん歩行の方も、失明すれば全く歩けないと思っていたのに、二時間かけての大阪ライトハウスと奈良の間の単独歩行も行えるようになっていた。私はその自信をもとに東京に出かけ、それまで籍を置いてくれた会社に辞職の挨拶をした。会社は私さえよければ残留もほめかしてくれてはいたが、障害者となって元の会社に戻るほど私の心は割り切れてはいなかった。

とにかく一人でもできる仕事と思い、私は盲学校のはり・灸の道に進むことにした。その学校で、普通科の教師にもなれるはずだから、教職を取りなさいと勧められた。そこで通信教育で社会科の教職をとることにした。もちろん点字の教科書はない。大勢のボランティアに頼み、テープに録音してもらい、それを聞きながら点訳した。レポートは点字でまとめ、またそれをボランティアに墨訳してもらう。もっと大変だったのは試験である。点字受験ができなかったので、点線で野線を浮きあがらせ、その間にボールペンで一字一字指でおさえるようにしながら書いた。試験が終わるといつも力が入りすぎて指を伸ばすことができないほどだった。

そんな思いをしてとった教職も、奈良県は教員採用試験の点字受験を認めていないとのこと、結局無駄足となってしまった。

それ以後もよく感じたのであるが、盲界には不適切な情報であってもまことしやかに流すことがよくある。わらにもすがりつく思いで盲学校に入ってきた者にとって、それがどれほどの意味を持つものであるか考えたこともないのだろうか。

しかし、私を見ていてくれた人がいた。その当時の校長先生で、一般教員採用試験の対象とならない療科の教員になることを勧めてくれた。私はその好意に甘え、一年間非常勤講師で学校に残してもらうとともに、その合い間を受験勉強に費やした。普通の点字はある程度のスピードで読めるようになっていたが、英語や数学の記号は読むのがこれほど大変なものだとは想像もしていなかった。

何とかかろうじて東京にある理療科教員養成施設に入った。もちろん入学生の中では最年長であった。そしてそこで聞いたことは、就職の順番は弱視男子、弱視女子、全盲男子、全盲女子というように視力の順であると。私のような年をくった全盲はなかなか就職が難かしいと。

いざ就職の場面になるとまさにその通りであった。就職試験などないところも多く、またあっても名のみで、試験の前から採用者は既に決まっていた。私は沖繩や鹿児島等を勧められた。全く行ったこともないところで白杖一本で暮らす自信はなかった。

次々と就職が決まっていく中で、私は一人惨めさをかみしめていた。半分諦めかけていた頃、また偶然が起こった。私の母校で急遽やめる先生が出たのだ。私はぎりぎりのところで奈良に戻ることができた。

勤めても私の心はなぜか落ち着かなかった。風雨が激しければ通勤の道にも窮した。またともに食事もできないまま学校に出かけたこともある。そして学校にあっても試験問題を作るのも、解答を読むのも弱視教員に頼らなければならなかった。一人でできる仕事と思ったのであるが、仕事につけばついたで他人の助けを得なければならぬ。当然他人の顔をうかがうようになる。たまたま嫌だった。

私は少しでも自分でできることをと思い、ワープロやパソコンに取り組むことにした。独力でできることをふやそうと思って始めたのであるが、専門的に勉強すればするほど朗読ボランティア等の他

人の力を借りなければならぬことがふえた。私はその矛盾に苦しみながら、心の底で障害をのろっていたし、また一人では何もできないという無力感にも襲われていた。

障害者を対象に教鞭を執りながら心の底で障害をいみきらう自分に私は苦しんでいた。恐らく周りの人の助力を得ながら、その日その日を気楽に暮らしていればそれほど苦しむこともなかったのだろう。しかし、私はできるだけ自分一人でできることをふやしたかった。結局努力すればするほど独力でできないことが出てきて頭を打つ、頭を打てばまた惨めさとくやしさに襲われる。そこから立ち直ろうとして、また努力すればまた頭を打つ。この繰り返しの中で、私の心は一層屈折していった。

そんな私の障害にたいする偏見を払拭してくれたのは長男の誕生であった。二十九歳にして結婚し、間もなく妊娠を知った。年とっての子どもはかわいいと言うが、私もまさにその通りで、妊娠五ヶ月頃から聴診器をあてては胎児の心音を聞いたり、あるいは妻の腹をさすって元気に出てこいとつぶやいたものである。出産を前にして私があった一つ心配したのは逆子ということであった。これも大きな県立病院のことだから医者と言うがままにしていれば大丈夫だと軽く流していた。

ところがである。無事出産の知らせを受けてわずか二時間後に、長男危篤の電話がかかってきた。夜の病院はひっそりとしている。何十分も待たすえ応待したのは産科の医者ではなく小児科の医者であった。結局逆子ということでの出産に手間取り、出産後間もなく仮死に陥ったそうで、生死は五分五分のことであった。一瞬産科の医者はなぜ出てこないんだと腹立たしく思ったが、長男の無事をた

だひたすら祈る気持ちで一杯のまま帰宅していた。

一週間たっても生死は五分五分であった。あれほど障害をいみ嫌っていたのに、私はたとえ障害が残ってもよいから生きていてくれることを願った。寝る時は夜中に悪い電話がかかってこないようにと恐れながら床についた。朝起きると、せめて今日だけでも悪い電話がかかってこないようにと願いながら学校に出かけた。二週間たってはじめて医者には生命の危険からは脱したと言った。私はほっと安堵のため息をついた。しかし、次に障害が残るかどうかは五分五分だと告げられた。人間は勝手なものである。今までは生きててさえくれれば障害が残ってもよいと考えていたのに、生命の危険を脱したと知ると障害も残らないことを祈るようになった。

そんな私の危惧をふっ飛ばしてくれたのは長男の泣き声だった。その日も私達夫婦は病院を訪れていた。出産後もう三週間以上もたつのに私はまだ長男に指一本ふれたこともなかった。せいぜいガラス越しに妻の教える方向に見えない目をやりながら私が父親だと心の中で叫んでいるだけだった。

ところがその日は私達の立ったガラスの向こうから、少しかすれた、それでいて本当にかわいい泣き声が聞こえてきた。その泣き声は次第に大きくなり、私の耳に鈴のように鳴り響いてきた。

「あれが俺の息子！」

私は思わず涙ぐんでいた。先ほどから私達の隣に立っていた見舞い客らしい老夫婦が、

「実に元気そうな赤ちゃんだ！」

そう話し合っていた。

その声を聞き、私は思わず心の中で叫んでいた。

「ええ、あれが私の息子ですよ！」

長男を私が大切に育てたのは言うまでもない。夜泣きが始まると私は毎晩数十分もだっこして寝かせた。入浴はもちろん、時には綿棒を肛門に突っこみ、浣腸までした。

二年後には次男も生まれ、私は自分の障害をのろっている暇もなくなった。そんな矢先長男の成長が止まった。検査をしてみると、成長ホルモンの不足による小人症だとのことである。心配していた後遺症がやはり出たのだ。私達はそれから毎日嫌がる長男をおさえつけながら成長ホルモンの注射をうつことになった。

「お父さん、かんべんしてよ。僕は小さいままでいいから！」

泣き叫ぶ息子を心を鬼にして私がおさえつけ、妻が注射をした。この注射、この子が高校生になるまで続けなければならない。すまなさに私の心ははり裂けそうであった。

その長男も注射のおかげか、小さいながらも順調に育っていた。私の不安は二つあった。一つはもちろん、長男が小人症であることにひがみはしないかということである。もう一つは父親が全盲で他の子ども達からいじめられはしないか、またこれが理由で非行に走らないかということである。

そんな心配もどこ吹く風。息子達は順調に育っていた。長男は毎日の注射にも慣れ、もう嫌だと

叫ぶこともなくなった。私は息子達に気がねして義眼を取り出すところなどは決して見られないようにしていたのであるが、ある時、ついに見つかり、

「お父さん、きもいな！（気持ちが悪いな）目、どうして取ったの？」

とあっさり聞かれてしまった。あんまりあっさりしているので、こんな目の父親でもこの子達はそれほど嫌がらないのだなと感心したほどである。

現在、長男が小学校三年生、次男が一年生であるが、休みのたびに私の家は小学校のようなものである。長男の友達も次男の友達もおしかけ、多い時は十人ほどになる。当然この子達も私が目が悪いことを知っている。それでも私の家に遊びにくる。私はほっとした。以前は友達が遊びにくると、人目のつきにくい自分の部屋にとじこめることにしていたが、最近では遠慮なく我が家を動き回っている。それどころか、家の中で暴れ回れば他人の子どもでも叱るようになった。

家族で外出する時も、前方に障害物があれば妻よりはやく子ども達が手をひいてくれる。手をつなぐことにも抵抗を感じていないようだ。

一方私の方にも変化が起きてきた。それまでは妻と歩く時でもできるだけ人目につかないように白杖をまるで隠すかのように折りたたんでいた。ところが息子達と手をつないで歩くようになり、次第に障害者であることを恥ずかしく思わなくなった。それどころか、障害者だからこそ息子達と手をつないで仲よく歩けるのだとも言えるかのように胸をはれるようになった。また長男も手引きすることな

ど何とも思っていない。まるで車の運転でもするかのように、すいすいと人波をかきわけ私の手を引いていく。結局私だけが気にしていただけなのだ。

他方次男はというと、こちらはお調子のりで、よく私の白杖を取り上げ、目をつぶってその白杖を振り回しながら、

「目が見えない人が通ります。ぶつからないようにどいて、どいて！」

などと言いながらふざけて歩く。余りにも明るく振る舞うので私としても怒れない。それどころか、障害を気にばかりしている自分を皮肉られているような感じさえする。

そんな次男も、

「お父さん、目が見えないのによく歩けるな！」

と感心したような声で言うこともある。それどころか、自分の友達に自慢までする。

「僕のお父さん、すごいんだぞ。目が見えないのに一人で歩けるんだ！」

私はこのような子ども達に接して、今まで持ち続けてきた障害にたいする偏見が溶けさっているのに気がついた。この子ども達と接するように、どの人もありのままに接すればよいのだ。わかりきった答えなのにどうしても障害者として身構えてしまっていたのだ。

私に教えてくれた息子達よ。お父さんはもうくよくよなんかしないぞ。だからいつまでも私のそばにいて見守っていておくれ。

そんな私の気持ちを表現した詩、「手のぬくもりをいつまでも」が昨年、NHKとNHK厚生文化事業団の障害者の日福祉キャンペーン「ハートで描く心のメッセージ展」に入選した。その詩を最後に掲げることで私の今の生き方の一片を示したい。

手のぬくもりをいつまでも

キャッチボールができなくて ごめんね

サッカーができなくて ごめんね

でも一緒に手をつないで歩くことはできる

目が見えなくなっても嬉しいことは

小学生になっても、中学生になっても

お前達と手をつなげることだ

喜多嶋きたじま

毅つよ

昭和二十一年生まれ 奈良県立盲学校教諭

住所 〒六三〇 奈良県奈良市

選評

優秀なサラリーマンが突然の難病で失明するという思いもかけぬ状況を、凄まじい努力で克服。新しい世界を切り拓く様は、それだけでも心を打たれます。でもそれは姿は変われど心は猛烈サラリーマンのままであったといえるかも知れません。感動的なのは、二児の父親となり、しかも長男が障害をもつという状況のなかで、この方の障害に対する姿勢が今までと質を異にする人間的なものに変わっていく点です。この自分の変化を自覚的に受け止めておられることに深く感動しました。

(羽田澄子)